日韓の名詞連結の対照

—N1 の統語構造上の違いを中心に—

洪　榮珠

キーワード：名詞連結、主要部(head)、補語、付加語、一語化

1. はじめに

日本語において名詞と名詞の連結は、基本的に連結の手段として「の」を介在した「N1 の N2」[1]形式で表れる。この形式は、韓国語において名詞を連結する助詞「ui[2]」を介在した「N1 ui N2」で表れるが、名詞同士が直接連結している「N1·N2」として表れる場合も多い。

日本語の「N1 の N2」に対する韓国語の名詞連結の対応関係は以下のようである[3]。

(1) a. 母の写真	b. eomma ui sajin
	b'. eomma sajin
(2) a. 空の星	b. haneul ui byeol
	b'. *haneul byeol
(3) a. 柿の木	b. *gam ui namu
	b'. gam namu

例(1)は、日本語の「N1 の N2」に対応する韓国語が、「N1 ui N2」と「N1·N2」の両方の形で表れる場合であり、例(2)は、「N1 の N2」に対して「N1·N2」は許さないで、「N1 ui N2」のみを許す場合である。また、例(3)は、「N1 の N2」に対して「N1·N2」のみと対応

---

[1] 本稿では、copula「だ」の連体形と考えられる「の」を介在させている名詞連結(学生の太郎)と、これに対応する韓国語の「-ida」の連体形「-in」が介在している「N1 in N2」形態(haksaeng in Cheolsu)に関しては触れないことにする。また、研究の対象となる「N1 の/ui N2」における N2 は非叙述性名詞に限定する。非叙述性名詞とは、述語として機能できる叙述性名詞(Predicate Noun)類、例えば、漢語 VN(Verbal Noun)の他に、日本語の場合、和語動詞の連用形、韓国語の場合、用言の語根に名詞化接辞(-eum,-gi)が付いた形態の名詞類を除外した名詞のことを指す。

[2] 韓国語のローマ字表記は、韓国国立国語研究院・文化観光部により 2000 年 7 月 7 日改正・告示されたものに準ずる。

[3] 本稿で分析の対象としている用例(日本語と韓国語それぞれ 105 例)は、日本語と韓国語の小説とそれぞれの対訳小説、そして、辞書類から抽出したものであり、全て、論文の最後に挙げた資料内の実例の分析となっている。多様な結合関係にある名詞連結を説明するためには、今後、作例をも加え、資料の範囲を広げ、より多くの用例を見ていく必要がある。

する場合である。

従来、「N1 の N2」「N1 ui N2」「N1-N2」の名詞連結に関する多くの考察は、N1 と N2 の間の意味関係について述べており、様々な解釈の可能性を提示している(cf.鈴木(1978,1982)、Kim, seung-gon(1969))。しかし、このような多様な意味関係は語用論のレベルで多様な文脈の中で解釈されたものであり、これらの意味は補部と付加部のような統語的な関係から捉えられる文法的意味とは区別して扱う必要があると考えられる。

本稿では、基本的に N1 と N2 の結合関係を統語的な関係として捉えることにする。そうすることによって、今まで論じられてきた名詞連結における N1 と N2 の意味関係も統語的な側面から捉えられると考える。

本稿の目的は、日本語の「N1 の N2」が韓国語において、何故(1)-(3)のような三つの対応関係で現れるのか、その環境を考察することである。

2. 先行研究

「N1 の N2」「N1 ui N2」名詞連結に関して、意味論的、統語論的アプローチをしている従来の研究を以下に概略する。

日本語では、「N1 の N2」において名詞句の主要部(head)である N2 に対する N1 の統語構造上の二面性について西山(1993)、森(1993)などが言及している。

2.1 西山(1993)

西山は、「NP1 の NP2」形態の名詞句における多様な意味関係の根底に統語論及び、意味論的要因があるとし、英語との対比から名詞句の中に「主語と目的語」「付加部と補部」という統語的関係を認めている。

(4) 主語と目的語

a. 主語関係：花子の絵(花子が描いた絵)；Hanako's picture「-'s 属格」

b. 目的語関係：花子の絵(花子を描いた絵)；the picture of Hanako「-of 属格」

(5) 付加部と補部

a. 付加部(adjunct)：長髪の研究者；a student with long hair

b. 補部(complement)：物理学の研究者；a man of physics

2.2 森(1993)

森(1993)では、西山(1993)と同様、「N1 の N2」名詞句における「N1 の」には、それぞれ「補部」と「付加部」という統語的二面性が存在すると述べている。森(1993)は補部と付加部の判別基準として、N1 の「主要部との隣接性」と、「「ハ」による題目化の可否」を提示し、補部は主要部の直前の位置にしか現れることができず、「ハ」による題目化が不可能である一方、付加部は主要部から離れた位置に現れることができ、「ハ」による題目化

が可能であるとしている。

(6) a. N1の主要部との隣接性

例　NHKノ、料理ノ番組　／　*料理ノ、NHKノ番組

b.　N1の「ハ」による題目化の可否

例　NHKノ番組がおもしろいコト　／　料理ノ番組がおもしろいコト

→NHKハ番組がおもしろい　／　*料理ハ番組がおもしろい

一方、韓国語の名詞連結の研究において、名詞も動詞のように項を必要とし、head名詞とそれに連結する名詞との間にある種の統語構造が存在するという統語論的アプローチをとっている研究として金(2001)、金(2003)、박(2002)、李(2003)などが挙げられる。以下では、李(2003)を取り上げ概略する。

2.3 李(2003)

李(2003)では、動詞と同じように、名詞(叙述性名詞と非叙述性名詞を全て含め)もその概念的性格によって項を要求し、要求される項が項構造の情報を成すと述べている。李は、非叙述性名詞において、補語と考えられる要素と付加語と考えられる要素の統語的違いを確認する方法として以下のような隣接テストを行っている。

(7) a. inki chukku seonsu　　a'. *chukku inki seonsu
(人気　サッカー　選手)　　(*サッカー　人気　選手)

(8) a. yeongeo chamgo munheon　　a'. *chamgo eyongeo munheon
(英語　参考　文献)　　(*参考　英語　文献)

b. godae yeongeo munheon　　b'. yeongeo godae munheon
(古代　英語　文献)　　(英語　古代　文献)

(9) a. baekhwajeom halin haengsa　　a'. *halin baekhwajeom haengsa
(百貨店　セール　行事)　　(*セール　百貨店　行事)

(10) a. seouldae mulrihak gyosu　　a'. *mulrihak seouldae gyosu
(ソウル大　物理学　教授)　　(*物理学　ソウル大　教授)

(11) a. seouldae ui mulrihak gyosu　　a'. *mulrihak ui seouldae gyosu
(ソウル大　の　物理学　教授)　　(*物理学　の　ソウル大　教授)

李は、上記の例から、「サッカー、参考、セール、物理学」は補語的価値を持つものである一方、「英語、古代、デパート、ソウル大」のような作成の時期や場所を表すものは付加語であり語順の制約がないとしている。

李(2003)にも述べられているが、名詞、特に非叙述性名詞において名詞が概念的に必須

的に要求するものが何であるかを想定することは意味論的な曖昧性(vagueness)という問題を必ず伴う。しかし、少なくとも、(7)-(11)のような現象を見ると、日本語と同様、韓国語の名詞連結の内部においても、head となる名詞とそれに連結する名詞との間に何らかの統語構造上の違いが存在することは確認できると考えられる。

次節では、形態的に単純な連結を見せる日本語の名詞連結の内部に存在する統語構造の違いについて英語表現を手がかりとして考えてみたい。

3. 日本語の「N1 の N2」の構造

本節では、西山(1993)のように英語の事情も視野に入れ、「N1 の N2」を英語表現と対応させて見る。そうすると、「N1 の N2」という同一の形式は少なくとも以下のような三つの異なる構造を持っていると考えられる。

3.1 英語の属格形態と対応する「N1 の N2」-所有・動作主・対象-

「N1 の N2」構造のうち、英語における属格形態「-'s 属格」、「-of 属格」と対応関係にあるものがある。これらの名詞連結における N1 は、主に所有者、動作主、対象を表す。

(12) 太郎の会社 : Taro's company (Taro ui hoisa/ Taro hoisa)
(13) 弟の帽子 : (my)brother's hat(dongsaeng ui moja/ dongsaeng moja)
(14) 母の写真 :(my)mother's picture/picture of (my) mother(eomma ui sajin/ eomma sajin)

(12)-(14)は全て N1 と N2 が属格関係にあるものであり、N1 に対しては、「所有者(possessor)」「動作主(agent)」「対象(theme)」の意味役割が想定できる。
例えば、例(12)に対しては、次のように考えられる。

(12) 太郎の会社
(12') 太郎が所有している会社、太郎が経営している会社、太郎が設立している会社…

例(12)の名詞連結に対しては、(12')のような、様々な解釈による連体修飾文を想定させることができるが、想定可能な文の中から捉えられる N1 の意味役割は「所有者」「動作主」のいずれかにまとめられる。
例(13)(14)に対しても以下の(13')(14')のような連体修飾文が想定できる。

(13) 弟の帽子
(13') 弟が所有している帽子、弟が買った帽子、弟が昨日捨てた帽子…
(14) 母の写真
(14') 母が所有している写真、母が取った写真、母が写っている写真…

名詞連結に想定可能な、上記の(13')、(14')の連体修飾文における N1 の意味役割も「所有者」「動作主」、または「対象」の三つのうちのいずれかに該当することになる。

他にも次のような例が挙げられる。

(15) ツバメの巣 ： swallow's nest

(15') ツバメが住んでいる巣、ツバメが作った巣…

(16) 心理学の教授 ： professor of psychology

(16') 心理学を教える教授、心理学を研究する教授…

(15)の名詞連結における N1 に対しては「対象」「動作主」「所有者」の意味役割を想定できる。(16)の名詞連結に対しても解釈によって多様な連体修飾文が想定可能であるが、様々な文の中から捉えられる N1 の意味役割は全て「対象(theme)」である。

このようなタイプの「N1 の N2」は N2 が主要部(head)[4]であり、「所有者」「動作主」に該当する N1 は、[＋有情性]の意味素性を持つという共通性を見せる。

N2 が主要部であることを認定するテストとしては、三宅(2001)で提示している次のようなテストを用いることにする[5]。三宅(2001)は、主要部は、文脈上省略することができるとし、以下のような例から検証を行っている。

(17) a. 大阪の町

b. 大阪の町並み

(18) a. *大阪の町は好きだが、東京のは嫌いだ。

b. 大阪の町並みは好きだが、東京のは嫌いだ。　　(三宅(2001:12-13))

三宅によると、N1 と N2 のどちらが主要部であるか判断しにくい上記の(17a)のような名詞句は、(18a)に見られるように N2 を主要部として省略することが不可能であるのに対し、N2 を主要部とする(17b)の名詞句は、(18b)に見られるように主要部の N2 を省略できる。

以下では、このテストを上記の(12)･(14)の名詞連結に適用してみる。

(19) a. 太郎の会社　　(=(12))

b. 太郎の会社は倒産したが、次郎のは倒産しなかった。

---

[4] 本稿における主要部(head)の概念は基本的に三宅(2001)で提示している概念に従っている。三宅は「主要部」とは、一般に、「句全体の範疇を規定する中心的要素」あるいは「意味的な中心要素(被修飾要素)」とされるものであると述べている。

[5] 三宅はこの種のテストは、名詞句に限らず、動詞句など他のカテゴリーにおいても成り立つことであると述べている(太郎はスパゲッティをφ、花子はピラフを食べた。(三宅(2001:17))。本稿では、名詞句における主要部認定テストとして便宜的に三宅(2001)のテストを用いているが、「省略」が名詞句における主要部を認定するテストとしてどこまで有効なのかについては今後更に検討していく必要がある。

(20) a. 弟の帽子　　(=(13))

b. 弟の帽子は小さいが、兄のは大きい。

(21) a. 母の写真　　(=(14))

b. 母の写真は家にたくさんあるが、父のはあまりない。

上記の(19)･(21)の名詞連結における N2 が文の中ですべて省略可能であるということは、これらは全て N2 を主要部とする名詞連結であるということである。

以上、英語の形態とも対応させながら、典型的な属格構造として表れる「N1 の N2」について考えてみた。典型的な属格構造として捉えられる「N1 の N2」は、英語においても属格を表す「-'s 属格」「-of 属格」形態と対応関係を見せる。また、主要部を認定するテストを通じ、これらの名詞連結は全て N2 を主要部として連結されていることが分かった。そして、これらの名詞連結における N1 に想定可能な意味役割は「所有者」「動作主」「対象」の三つにまとめられる。

3.2 前置詞句で表される「N1 の N2」

「N1 の N2」構造の第二のタイプは、以下のように、英語において主に前置詞句で表される場合である。

(22) 空の星　：　stars in the sky (haneul ui byeol/*haneul byeol)

(23) 机の花　：　a flower on the desk(chaeksang ui kkot/*chaeksang kkot)

(24) ソウルの学生　：　a student in Seoul(seoul ui haksaeng/*seoul haksaeng)

このようなタイプの「N1 の N2」は、N1 が付加語(adjunct)であると考えられるものである[6]。付加語として捉えられる N1 は、意味的にも主要部の N2 の意味を内部的に補わずただ限定する。

付加語の位置の N1 に来る意味役割としては主に「場所」が挙げられる。例えば、(22)の場合は以下のような文が想定できる。

(22) 空の星

(22') 空から見られる星、空できらきら光っている星、空にある星…

例(22)の名詞連結に対しては(22')のような様々な連体修飾文を考えられるが、基底の連体修飾文に如何なる動詞を想定しても N1 の「空」に与えられる意味役割は全て「場所」

[6] Radford(1988)にも言及されているように、英語における前置詞句の中には補語と捉えられるものも存在し、今後更なる考察が必要であるが、本稿で取り上げている「時間」や「場所」の前置詞句は大方付加語に該当する。

として共通していることが分かる。

例(23)(24)に対しても同様に考えられる。

(23) 机の花

(23') 机に飾ってある花、机に置いてある花、机に落ちている花…

(24) ソウルの学生

(24') ソウルに住んでいる学生、ソウルで勉強している学生…

また、このようなタイプの「N1 の N2」は、下の例(25b)のような主要部認定テストからも確認できるようにN2が主要部である。また、この場合N1は、「場所」という、付加語に該当する意味役割を持っている。

(25) a. 空の星

b. (東の)空の星は火星だが、(西の)空のは金星である。

以上見てきた「N1 の N2」の第二のタイプは、N1 が付加語に相当するもので、英語においても前置詞句で表される場合が多い。また、これらの名詞連結は第一のタイプと同様、N2 を主要部とした連結であり、この場合、基底に想定可能な連体修飾文から捉えられるN1の意味役割は主に「場所」に該当する。

3.3 複合名詞化した「N1 の N2」

「N1 の N2」構造の第三のタイプは、以下のように、英語において「N1-N2」形態、或いは一語で表される場合である。

(26) りんごの木 : apple tree (*sagwa ui namu/ sagwa namu)

(27) バラの花 : roses (*jangmi ui kkot/ jangmi kkot)

(28) クリスマスの日 : Christmas (*krismas ui nal/ krismas nal)

上記の名詞連結には N1 と N2 の間に意味関係を想定し難く、名詞句の形をしてはいるものの、ほぼ一語化しているものと考えられる。

これらの名詞連結は、三宅(2001)においても「主要部同格型」と呼ばれ、N1 と N2 の間に修飾関係があるかどうか、どちらが主要部かがはっきりしないタイプであるとされている。実際、上記の(26)-(28)の名詞連結に対しては、基底にある種の連体修飾文をも想定することができず、以下のような主要部認定テストにおいても N2 を主要部として認め難いことがわかる。

(29) a. りんごの木

b. *去年は庭に柿の木を植えたが、今年はりんごのを植える予定だ。

以上、「N1 の N2」の第三のタイプは、主要部の存在がはっきりせず、N1 と N2 の間に修飾関係を認め難いタイプのものである。これらの名詞連結は英語においても一語や二語の連結で表される。

4. 「N1 の N2」に対応する韓国語の名詞連結

本節では、前節で述べた三つのタイプの「N1 の N2」と、これらに対応して表れる韓国語の名詞連結を観察し、この際の韓国語の名詞連結を分析する。

4.1 タイプ 1 の「N1 の N2」に対応する韓国語の名詞連結

典型的な属格関係を表すタイプ 1 の「N1 の N2」の特徴は、次の例(30)に示されているように、N1 に与えられる意味役割が「動作主(agent)」「所有者(possessor)」「対象(theme)」であり、N1 が項に該当するということである。

(30) 母の写真

a. 母が持っている写真(N1：所有者)

b. 母が撮った写真(N1：動作主)

c. 母が写っている写真(N1：対象)

このような「N1 の N2」に対応する韓国語の名詞連結を見てみると、

(31) a. eomma ui sajin

b. eomma sajin

のように「ui」が表れる場合(31a)と、「ui」が表れない場合(31b)の両方が可能であることが分かる。

他に、このようなタイプの例として、次のようなものが挙げられる。

(32) 太郎の車

a. 太郎が持っている車　　b. 太郎が運転する車…

(32') 太郎の車

a. Taro ui jadongcha　　b. Taro jadongcha

(33) トラックの運転手

a. トラックを運転する運転手　　b. トラックに乗っている運転手…

(33') トラックの運転手

a. treok ui unjeonsu　　b. treok unjeonsu

(32)-(33)はそれぞれ(32a,b)(33a,b)のように解釈され、N1が「動作主」或いは「所有者」「対象」を表すと考えられる。上記のとおり、(30)-(33)の例におけるN1には、「対象」「動作主」「所有者」の意味役割が想定され、それぞれは項に該当し、日本語の「N1 の N2」は、韓国語において「N1 ui N2」と「N1-N2」の両形態として、(32'a,b) (33'a,b)のように対応すると言える。

但し、このような日本語の「N1 の N2」におけるN2が抽象名詞である場合には、韓国語において両形態として対応できず、「N1 ui N2」形態のみと対応する[7]。

(34) 少年の希望

a. sonyeon ui huimang　　b. *sonyeon huimang

(35) 愛の力

a. sarang ui him　　b. *sarang him

このような事実から、「N1 の N2」が「N1 ui N2」「N1-N2」の両形態として対応する環境について次のようなことが提示できる。

(36) N1が項である場合、日本語の「N1 の N2」に対応する韓国語の名詞連結は、基本的には「N1 ui N2」と「N1-N2」の両形態で現われる。但し、N2が抽象名詞として表れる「N1 の N2」に対しては、韓国語の名詞連結は「N1 ui N2」のみが対応する。

4.2 タイプ2の「N1 の N2」に対応する韓国語の名詞連結

タイプ2の「N1 の N2」は、上記の(22')-(24')で見たように、N1に与えられる意味役割が全て「場所(location)」で共通しており、N1は付加語に該当するという特徴を持つ。

(37) 空の星　　(=(22))

a. haneul ui byeol　　b. *haneul byeol

(38) 机の花　　(=(23))

a. chaeksang ui kkot　　b. *chaeksang kkot

(39) ソウルの学生　　(=(24))

a. seoul ui haksaeng　　b. *seoul haksaeng

---

[7] 抽象名詞の連結にはhead名詞に対するN1の統語構造上の違いと関係なく「ui」の介在が必須であるというのが現段階で言える結論であるが、抽象名詞に関してはどこまでを抽象名詞として認めるべきか、具象名詞と同じルールで説明できない理由などに関して今後更なる考察の必要がある。

上記の例は、英語においては前置詞句と対応している(例(22)-(24))ことからもわかるように、N1が項でなく付加語に該当するものである。このように、N1が付加語の場合、「N1のN2」に対応する韓国語は「N1 ui N2」であり、「ui」の生起は必須となる。

他に、N1が付加語であると考えられるこのタイプの例としては次のようなものがある。

(40) 辞書の単語

a. 辞書に載っている単語　　b. 辞書に書いてある単語…

(40') 辞書の単語

a. sajeon ui daneo　　b. *sajeon daneo

(41) 洞窟の熊

a. 洞窟にいる熊　　b. 洞窟に住んでいる熊…

(41') 洞窟の熊

a. donggul ui gom　　b. *donggul gom

(40)-(41)の名詞連結にはその基底にそれぞれ(40a,b)-(41a,b)に見られるような様々な解釈の連体修飾文が想定され、N1に据えられる名詞は全て「場所」を表す。N1が「場所」の意味役割、つまり、付加語に該当するような意味役割を与えられている場合、日本語の「N1のN2」は、(40'a,b)-(41'a,b)に見られるように、韓国語において「N1 ui N2」形態のみと対応する[8]。

以上のことから、「N1のN2」が「N1 ui N2」のみと対応する環境について次のようなことが言える。

(42) N1が場所の意味役割を持つ付加語であれば、日本語の「N1のN2」に対して韓国語は「N1 ui N2」の形態と対応する。

4.3 タイプ3の「N1のN2」に対応する韓国語の名詞連結

タイプ3の「N1のN2」の特徴は、「の」によって連結され、名詞句の形態をしてはいるものの、どちらが主要部なのかがはっきりせず、名詞句全体で一つの指示対象を表し、ほぼ一語化しているということである。

---

[8] N1が「場所」のような付加語に該当する場合「ui」の介在が必須になるのが一般的であるが、韓国語の一部の連結には、以下のように、反例と見られる現象も存在する。

例　gaeul ui bam/gaeul bam(秋の夜)、jibang ui saram/jibang saram(地方の人)、sigol ui mal/sigol mal(田舎の言葉)…

これらの連結ではN1が「場所」であっても「ui」の介在が許される。これらの現象が反例になるのか、それとも「ui」の介在を許容する別の要因が存在するのかについては前後に来る名詞類をも考慮に入れて今後更に検討していかなければならない。

(43) りんごの木

a. *sagwa ui namu　　b. sagwa namu　　(=(26))

(44) バラの花

a. *jangmi ui kkot　　b. jangmi kkot　　(=(27))

(45) クリスマスの日

a. *krismas ui nal　　b. krismas nal　　(=(28))

上記の(43)-(45)に見られる「N1 の N2」に対応する韓国語は、全て「ui」の介在を許さないため、形態的な振る舞いも一語化した複合名詞と似ている。これらの名詞連結には基底に連体修飾文を想定できず、従って、N1 は項としても付加語としても考え難い。このようなタイプの「N1 の N2」は、主に N1 と N2 が下位語と上位語の関係にある場合の連結において見られるもので、この場合、日本語の「N1 の N2」は韓国語のおいてほぼ一語化している「N1-N2」形態のみと対応する。

上記の例のほかには、以下のようなものが挙げられる。

(46) レモンの木

a. *lemon ui namu　　b. lemon namu

(47) つつじの花

a. *jindalrae ui kkot　　b. jindalrae kkot

(48) 誕生日の日

a. *saengil ui nal　　b. saengil nal

以上のような現象から、日本語の「N1 の N2」が韓国語において「N1-N2」と対応する環境として次のようなことが言える。

(49) N1 が項でも付加語でもないと考えられる場合の日本語の「N1 の N2」は、韓国語において一語化したと考えられる「N1-N2」で対応する。

5. おわりに

本稿では、日本語の「N1 の N2」の単一の形態に三つのタイプが存在することと、それぞれの構造が韓国語の名詞連結においては「ui」の介在可能性の違いという形態的違いとして反映し表れることを考察した。考察の内容は以下のようにまとめられる。

まず、タイプ 1 の「N1 の N2」は、英語において属格を表す形態「-'s 属格」、「-of 属格」と対応するものである。この場合 N1 に想定される意味役割は、主に「所有者(possessor)」「動作主(agent)」「対象(theme)」であり、これらは全て項に該当する。N1 が項である場合、日本語の「N1 の N2」は韓国語において「N1 ui N2」と「N1-N2」の

両方で対応する。ただし、この場合のN1或はN2は具象名詞でなければならない。

次に、タイプ2の「N1のN2」は、主に英語の前置詞句に該当するものである。この場合のN1は付加語であると考えられ、主に「場所」の意味役割が与えられる。N1が付加語に該当する場合、日本語の「N1のN2」は韓国語において「N1 ui N2」で表れ、「ui」の介在は必須となる。

最後に、タイプ3の「N1のN2」は、どちらが主要部なのかがはっきりせず、N1を項としても付加語としても捉えられない場合のものである。これらの名詞連結は全体で一つの指示対象を表し、ほぼ一語化しているものと見られ、この場合の日本語の「N1のN2」は韓国語において「ui」の介在を許さない「N1-N2」と対応する。

今後は、N1が「場所」の場合でも「ui」の介在が任意の連結や抽象名詞が関っている連結など一部反例と見られる現象の扱いについて、前項と後項にくる名詞類を考慮に入れ、細かな観察や記述を通して説明していく必要がある。

【参考文献】

奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論』大修館

奥津敬一郎(1975)「複合名詞の生成文法」『国語学』101

影山太郎・柴谷方良(1989)「モジュール文法の語形成論－「の」名詞句からの複合語形成－」『日本語学の新展開』久野暲・柴谷方良編 くろしお出版

影山太郎(1993)『文法と語形成』くろしお出版

柴谷方良(1978)『日本語の分析』大修館

鈴木康之(1978)「ノ格名詞と名詞との組み合わせ（1）－（4）」『教育国語』55, 56

鈴木康之(1982)「「名詞の－名詞」というとき」『国文学解釈と鑑賞』52－2

西山佑司(1993)「「ＮＰ１のＮＰ２」と“ＮＰ２ofＮＰ１”」『日本語学』12 明治書院

三宅知宏(2001)「「主要部」の概念と“Ｘの Ｙ”型名詞句」『鶴見大学紀要』38 鶴見大学

森捨信　(1993)「日本語の「甲ノ乙」名詞句－「甲ノ」の統語的二面性」『言語』22

金光海(1984)「{의}의의미」『문법연구』5 塔出版社

김병일(2001)『세종 우리말 연구총서7 국어명사구의 내적구조연구 』세종출판사

金昇坤(1969)「冠形格助詞攷」『文湖』건국대학교국어국문학회

박철우(2002)「국어의 보충어와 부가어 판별기준」『언어학』34 한국언어학회

李善雄(2003)「国語名詞의論項및論項構造연구를위한예비적考察」『語文研究』31巻3号韓国語文教育研究会

任洪彬(1981)「存在前提와屬格標識 {의}」『언어와언어학』7

최경봉(1999)「관형격구성의 구조와 의미」한국어학회편저『국어의 격과 조사』 월인

Radford, A .(1988) *Transformational Grammar*,Cambridge University Press, pp.175-196

【用例出典】
『ノルウェイの森(上)』(1987) 村上春樹　講談社
『상실의 시대 (上) 』(1989) 村上春樹 著、유유정 訳 문학사상사
『우리들의 일그러진 영웅』(1987) 李文烈 아침나라
『我々の歪んだ英雄』(1992) 李文烈著、藤本敏和 訳 情報センター出版局

【参考辞書類】
『民衆엣센스日韓辞典』(1987) 安田吉実・孫洛範 編　民衆書林
『東亜프라임韓日辞典』(1994) 李賢起　監修　東亜出版社
『新明解国語辞典 第四版』(1989) 金田一京助　外 編　三省堂